

海外レポート 最新 インドのブラックタイガー養殖事情③



—インドアクア'95、藤本岩夫氏の有機エビ養殖 (最終回)

中島 満

一月二三日から三日まで急遽インドを訪問する機会をえた。二七日から四日間マドラスで開かれたインド商業省・海産物輸出振興局(MPEDA)主催インドアクア95への出席を機に、タミルナド州のハッチェリー建設状況とアンドラ・プラデッシュ州ネロール地区のエビ養殖近況を駆け足取材した。

今回は、その短報と現地活躍するAAC(エイシアン・アクアカルチュアリー社)藤本岩夫氏のエビ養殖熱血指導ぶりを紹介してみることにしたい。

ハッチェリー建設ラッシュ 地帯を行く

欧米列強が一七世紀以降アジア覇権の最初の基地にしたのがインド東岸中央部のマドラスである。インドのエビ養殖の発信基地もこのマドラスにある。ここから東岸ぞいに北に南へと技術や情報の新しい流れが伝わっていくというのが、この五年の急速なインドエビ養殖産業の展開の特徴である。

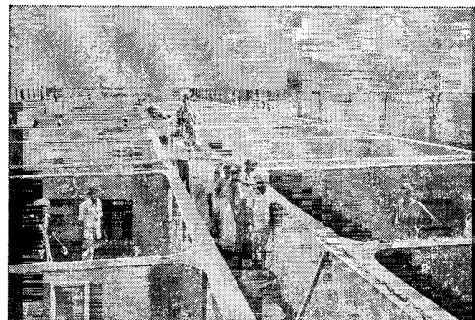
マドラスの北約二〇〇kmに位置するネロール。この海岸地帯四〇kmの砂浜と草原地帯に突如一大養殖地帯が出現したのが一九九〇年のことで

ある。大規模養殖池の造成をはじめ中小農民による数ha規模の池はそのマドラスから北部を中心に進んだものの、今度は池に入れるべきエビの種がない。右を向いても左を向いても造成中の池、ところが水を入れて養殖している池はぼつぼつという、なんともこんな異様な光景が延々と続いていた。

そして、種苗不足と種苗の高騰をみこしてのハッチェリー建設が急ピッチですすんだのが二年ほど前からである。ハッチェリー建設のキーとなるのが親エビの確保であり、この条件を満たす場所が、東海岸ではゴダバリデルタ北端のカキナダと、マドラスの南二〇〇kmのカウベリーデルタ北端のチダンバランであった(二月号一八頁地図参照)。

サクセスストーリーが行き交う ラバブル街道

マドラスとチダンバランのちょうど中程にマラカナムという小さな漁村がある。ここから、ボンディチェリーをはさんで、チダンバランにか



マルカナムで建設中のアスピニグループのハッチェリー。

けての約五〇kmの海岸にそって、建設中の施設あわせて一五軒以上のハッチェリーが点在している。わたしは、そのうち藤本岩夫氏が指導管理する所を主体に五カ所をみたが、その中から二つの典型的なハッチェリーについてふれておこう。

一つが東海岸最大規模のアスピニグループが建設をすすめるマルカナムのハッチェリーである。アスピニグループは、インド東海岸各地に養殖場、加工場、ハッチェリーをもつ現在ではインドの最有力パッカーである。三haの敷地にメインのラーバルタンク四五基規模の施設が四月に稼働をはじめるといふ。一年間の種苗生産能力が三億尾で、これと同規

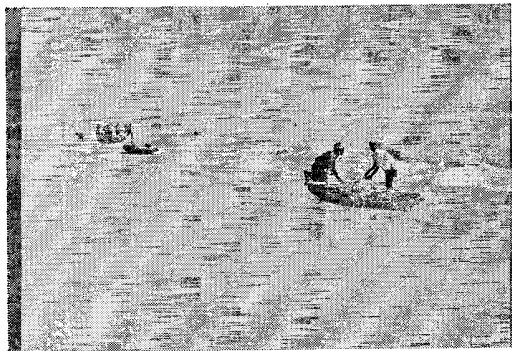
模の施設が敷地内に、近く着工されるそうである。同社にはバ
イザックの六〇〇〇万尾の供給
能力のある稼働中の施設と、カ
キナダ、ネロールに建設中の施
設があり、単純計算で行けば、
一社だけで将来は一〇億尾供給
をまくろんできるといわれる。

もう一つが、直径六mのラー
バルタンク二〇基を稼働させて
いるヴェンチュアー・アクア社
のバックヤードハッチェリーで
ある。年間三〇〇〇万尾の生
産能力がある。この会社は、全
くの新規参入で、一年半前の一
部稼働時には、その直後に一尾
一ルビー五〇パイサ(約四・五
円)の種苗高騰となり、一回一
〇〇〇万尾近い出荷を繰り返
し、一シーズン日本円にして一
億円近い利益を上げたといわれ
る。

いわば無一文借金だらけの個
人企業からスタート、わずかに
シーズンで借金完済の億万長者
というわけである。この二年間
で、こうした話は別に珍しい事
ではなくなくなってしまった。個人
投資家に加えて財閥系大手企業
などがきそってハッチェリー建

設にマトを絞ってここまで来たとい
うことなのだろう。

アスビニグループのマルカナム
の三haの巨大ハッチェリーの土地付き
総工費は七〇万ドル(約七〇〇万
円)という。種苗価格が一尾〇・五
ルビー程度であったとしても、三億
尾生産が軌道に乗ればすぐもとがと
れるという計算である。昨年前半ま
でに稼働ができたハッチェリーのサ
クセスストーリーが、現在のインド
のエビブームにさらに火をつけた格
好になっているようだ。



小型丸木船で親エビを採取する。

このマルカナムからモダンバラ
ンまでのこぼこの海岸道路を、だれ
がいい始めたか「ハッチェリー・バ

ブル街道」とよんでいるそうであ
る。タイやインドネシアでもエビ養
殖の創成の時期には付きまとう話な
のだが、数年で急成長したとはい
え、一年間の養殖ブラックタイガー
の絶対生産量が、有頭ベース二万t
に満たない現実の数字に対して、こ
のヒートぶりをみれば、こうした
「バブル」現象の話にはいささか驚
くばかりである。

インドアクア95の熱気の背景

こうしたエビブームを背景とし
て、エビ養殖ショー・インドアクア
95が、一月二七日からマドラスで開
催された。前回のインドアクア93
は、インドにおけるエビ養殖スター
トの年に開かれただけに、会場を訪
れる農民やエビ加工業者もまた「ど
うしたらエビを養殖することができ
るのか」といった初歩的な情報交換
の場としての熱気に包まれていた。
ところが、今回は前回以上に規模も
大きく、情報交換の質はより実践的
となり、レベルアップした内容にな
っていた。

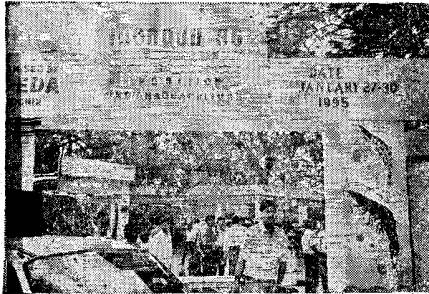
一八〇の出展企業も、三分の一が
餌料関係、三分の一がハッチェリー
・養殖場関係、のこる三分の一が機
械資材その他という構成。特に餌料

と、ハッチェリーのPRがめだつ。

藤本岩夫氏のAACの展示コーナ
ーを訪れる人達も、より具体的な協
力を要請を行うようになっていたの
ことであった。四日間の同社への訪
問社は、記者名だけで二〇〇〇名あ
まりにのぼるから、前回の倍以上
という盛況振りだ。そろいのユニフ
ォームをきたスタッフを二〇人近く
集めたCPグループやウォーターベ
ース社、実績主義のアスビニグルー
プ、趣向をこらした飾り付けのサラ
ット・シーフーズ社など、人気
コーナーには常に人だかりができて
いた。

会場には、前回とは異なり、日本
人の姿もみられ、聞くとスーパビー
バイヤーだという。インドのブラッ
クタイガーの日本市場への浸透が着
着と進んでいる証明ということだろ
う。

しかし、この人気の背景にはもう
一つの理由があった。インドでは前
述したハッチェリーバブルの陰で、
現在深刻な問題が突き付けられてい
るのである。即ち、昨年七月以降、
断続的に起こってきたブラックタイ
ガーの斃死が、東海岸の新興養殖地
帯全域に広がっていたのだ。現在、
オリッサ州と西岸の地域を除いて、



インドアクア95会場入口。

東岸のほとんどの池は、水を干し上げて休耕田状態になっている。

この原因は、はたしてウイルス性によるものなのか、今年の生産にどう影響をあたえるのか、いつから種苗の池入れが可能になるのか。インド国内のパッカー、養殖業者、餌料サプライヤー、コンサルタントにMPEEDAなどすべてのエビ関係者が疑心暗鬼の状態になっていたのである。

今回のインドアクアでは、テクニカル・セッションにおいて、特にこの「斃死」問題がとりあげられ、事態の深刻さがうかがわれた。しかし、ウイルス

性による原因が指摘されたものの、今後の具体的な対応は、第一回作は池を休ませること、六月から種苗の池入れを始めること(MPEEDAからの提案)などが示されているに過ぎない。中には、待ち切れずに三月から池入れを始めようという意見や、そういう先走り組の様子をにらんでいる慎重派がいるなど、生産再開の見通しはまだまだたっていないというのが現状のようである。

実質、ブラックタイガー養殖五年目の今年が、インドの今後の方向をきめるといっていい。

藤本岩夫氏の横顔

藤本岩夫氏。現在四八歳。東京水産大学の増殖学科を卒業後、エビ養殖のフジナガで知られた藤永くるまえび研究所をへて、インドネシア、フィリピンで自らエビ養殖に従事しながら、フィリピン・ケソン市にエビ養殖のコンサルタント会社のエイシアン・アクアカルチュチャー(AAC社)を設立。一〇年前にMPEEDAの要請ではじまったカキナダにおけるセミインテンシブ養殖場の造成プロジェクトに加わる。これがきっかけになって、三年前にAAC社を事実上マドラスに移し、その後は、



中央が藤本岩夫氏、右端は西岸のシャンキ社・カマッツ社長(AACの展示コーナーで)。

独自の藤本メソッドをいかして、インドの現在のエビ養殖急成長に常に有力な指針を与えつづけてきた。

今回の連載の最後に、彼のユニークというより実に明快な養殖哲学と、一〇〇人近いフィリピン技術者たちを育て、インドの地で彼らを「活かし」ている様子を紹介してみようと思う。

わたしと藤本氏との出会いは、彼の養殖法を記した原稿に添えた一枚の写真によってであった。ジャングルの中の池で、現地人スタッフとともにパンツいっちょうで泥んこになって耕うん作業をしていた。彼が目指すエビ養殖は一言でいえば「有機エビ養殖法」である。いいかえれば

農業において農薬をできるだけ使用せず、安全でうまい野菜作りのコンセプトが見直されているように、エビ養殖においても全くそれは同じでなければならぬというのである。

台湾式の超集約型養殖は七年前に完全に消え、そして、タイ、インドネシアにおける病気の頻発、一年半前の中国の大正エビ・クルマエビの病気による急減、そしてインドもその例外ではなかった。超集約から粗放養殖までが大量斃死を経験している。

エビ養殖においても、農業と同じように、大切なのは養殖の原点に返った「人づくり・土作り」しか、こうした池の自家汚染や斃死事故を防ぐ対策はないというのである。

人づくり・種作り・土作りが強いエビをうむ原点

別に有機養殖法といっても特別なことを行うわけではないが、簡単に列挙してみよう。

◇ハッチェリーでの親エビは輸入ものではなく、現地確保を原則とし、産卵は一回にとどめる。高密度の飼育を避け、薬品の使用をせず、結論として健康な種作りをする。

◇…養殖の基本として池の休耕を取り入れた分段養殖を導入する。農薬、抗生物質は一切使用しない。

◇…そして、肝心なのは池干し後の池準備作業である。土作り作業といいかえてもいい。耕うん作業後の、有機・無機肥料の散布投与。インドでは、建造物に不可欠なレンガ焼きにより排出するモミ殻灰の池底散布が効果があり、有用バクテリアを活用した堆肥をつくり、これに珪酸鉄などを加えた肥料を作り、有機農業の土作り技術を実践している。

◇…養殖にはいつてからは、生産性の維持のために、独自に提携したブランドの人工餌料を使用し、生産目標は、池の特徴によって一回作は一〜四tを目指す。

藤本氏は、一切の化学肥料、薬品は使わないが、より強いエビ作りには効果があるとされるカロチノイド系の「CAROT OF」とか、最近注目されている有効微生物群「EM」など、

環境の崩壊型から蘇生型への改善が少しでも期待されるものがあると聞けば、すぐに自ら試し、綿密なデータをとっている。

これらは、むしろ情報の多い日本の養殖業者には釈迦に説法かもしれない。しかし、藤本氏が常に口にするのは、「こんな手間のかかることを手を抜かずにやってもらうよう、現場の技術スタッフに目的を説明し、理解させられるか」どうか。藤本氏が考えてきた、強くてうまいエビ作りの理想を、現場のスタッフが理解して実践できるかどうかなのである。人づくりに帰結する。



ACCのスタッフ（マルカナムのハッチェリーで）。

ハッチェリーの管理、池の管理など一日の睡眠時間が三、四時間、しかもインドという環境下で働くだけでなく、藤本メソッド、藤本イズムに習熟したスタッフこそがかれの最大の財産だと常にいう。既に、一九七九年から彼はほとんどの収益をつぎ込んで、フィリピン・ビコール大学水産学部に通学生を送り込み、さらに大学から長期に研修生を受け入れた。卒業生をAACで採用してきたのである。藤本氏は、「フィリピンだけでは、彼らの働き口には限界があり、必然的に現在のインドの場に足を踏み入れることになった」のだそうである。三年前には一〇数人だったスタッフも、現在では一〇〇人規模にまで拡大している。

わたしが、本誌で藤本氏を紹介しているのも、インドという遠い地にもこんな土臭い「養殖人間」がいることを日本の養殖業者に知ってもらえればということからである。

わたしが、藤本氏のことをちょっと紹介しますからと先月末の帰国まえにいったら、次のようなメモを書いてくれた。

「わたしの夢は、日本人がフィリピンでフィリピン人を育て、そのフィリピン人がインドでインド人を育て

る。そして、インド人がアフリカでアフリカ人を育てることです。わたしは、今年、このインドにベトナム人研修生を呼ぶつもりです。来年にはチャンマーの若い人をぜひこのインドで研修させたいと考えています。インドの国内では、農漁村出身の低位カーストの高校卒業クラス若者を重点的に育てたい。すでに何人が育ててきました。またネパールなど北部山岳地帯のグルカなどの若者も加えるつもりです。各地の養殖場にはローカルの日雇いには三割位の女性を加えています」。

インドのエビ養殖産業は、AACのフィリピン技術者の優秀さ、粘り強さが引き金になったようで、AACが関係しないほとんどの養殖場でもこの二年間で台湾系技術スタッフからフィリピン技術者にきり変わったといわれる。

マドラスの藤本氏のオフィスの壁の片隅に次のようなものがかけてあった。

Boss is always right

If Boss is wrong

…… see rule #1

(水産ジャーナリスト)

(おわり)